The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	米国一般教書演説における分離不定詞についての記述分析 : 1960 年代から2020 年の用例を中心に
Author(s)	福本, 広光
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 57-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

米国一般教書演説における分離不定詞についての記述分析

—1960 年代から 2020 年の用例を中心に—

福本　広光
大阪大学言語文化研究科
〒560-0043 豊中市待兼山町 1-8
Email: u163938a@ecs.osaka-u.ac.jp

概要　本稿では，歴代米国大統領による一般教書演説 (State of the Union Address)を対象として，そこで用いられている分離不定詞の特徴を分析する。具体的には歴代大統領による演説データを集積して約 230 年分のコーパスを構築し，テクストデータにアノテーションを施して当該構造を抽出し，使用の実態を量的・質的観点から探ってゆく。分析においては，検索して得られた用例の通時的頻度推移を観察したうえで，比較的高頻度であった 1960 年代から 2020 年までに焦点を当て，その期間に使用された分離不定詞の用法について複数の観点から検討する。本試論は，一般教書演説を対象とした量的推移調査を基礎とした用例の文体論的分析を通して，特徴的な分離不定詞の用法の一端を炙り出すことが目的である。

キーワード 分離不定詞，一般教書演説，用法分析

A Descriptive Study on Split Infinitive in the SOTU:

With a Focus on the Examples from the 1960s to 2020

Hiromitsu Fukumoto
Graduate School of Language and Culture, University of Osaka
1-8 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka, 560-0043 Japan

Abstract　This paper describes and analyzes some of the features of split infinitive appearing in the State of the Union Address (SOTU).　The investigation aims to shed light on some of the typical usages of split infinitive in political contexts. We construct a corpus by accumulating the data of speeches about 230 years from the end of the 18th century to the present, and annotate the text to extract the constructions' examples. In the discussion, we combine quantitative and qualitative perspectives. Specifically, we observe the transition in the frequency of split infinitive examples and focus on the period from the 1960s to 2020, when a relatively large number of contexts are available, to explore the characteristics of usage from the extracted examples. As a result of the analysis, we get several clues to uncover a part of the usage of the split infinitive structure, which is characteristic of the State of the Union Address.

Keywords split infinitive, State of the Union Address, usage analysis

1. はじめに

本稿で対象として取り扱う, (1) のような分離不定詞 (split infinitive) は中英語期から用例が確認されていたにもかかわらず, 規範文法の全盛期, つまり 18〜19 世紀にはその使用が厳しく非難されていた (Alford 1864; Fowler and Fowler 1906; Fowler 1926; Visser 1966) 。一方, 現代英語では比較的容認されるようになり(Curme 1931; Quirk et al. 1985; Huddleston and Pullum 2002 etc.), 使用される機会が増えつつある。

(1) Systematic investigations **to better understand** the likely mechanisms are urgently needed.
(COCA, 2019, ACAD)

しかし，文法書や場面状況によっては依然として批判を受けることもあり，現代英語における語法の中でも議論を巻き起こしているものの一つである。

分離不定詞はアメリカ英語において頻繁に見られる (Fischer 2007:268, Leech et al. 2009: 263, Mitrasca 2009: 118)と報告されており，筆者も特にアメリカ英語における分離不定詞の(特に通時的)な実態について大規模コーパスを用いて考察してきた (福本 2018, Fukumoto 2019) 。さらに近年では，米国大統領による演説 (スピーチ) において使用されている分離不定詞の用法についての分析も行っている (Fukumoto, forthcoming) 。

先行研究では，通時的・共時的コーパスを用いた量的分析は多く存在する (Fischer 2007, Mitrasca 2009, Calle-Martín and Miranda-García 2009, Perales-Escudero 2011, Calle-Martín and Romero-Barranco 2014, Calle-Martín 2015 etc.)ものの，大統領による演説をコーパスとして調査したものは管見の限りあまり存在しないため，考察の余地が多分に残されている。さらに，米国大統領による演説は，独立以降，時代を超えて世界的な影響力を持つ媒体の一つである。それらは内容もさることながら，語法や文体についても細心の注意が払われており，政治学は言うまでもなく，「聴衆に向けて，特定のメッセージをいかに効果的に伝達するか」という言語文化学の見地から論じられることがある。殊に就任演説など，歴史や伝統のある演説では明快で格調高い英語が採択されやすく，その演説がなされた時代の「正しい」英語の枠組みを十分に反映しているとされる[1] 。一見すると，格調高い英語を用いる傾向が強い大統領演説と，語法として批判を受けやすい分離不定詞は相容れないもののように思われるかもしれない。では，日常的なレジスターのみならず，政治的なテクストにおいてもそれらは実際に使用されているのだろうか？また，使用されているとすればどのような形においてか？ 本稿では，大統領演説の中でも長い伝統を持つ一般教書演説を対象として，これらの問いにアプローチしたい。

[1] 大統領演説テクストの持つ性質について，田畑智司教授に御教示いただいた。

2. 一般教書演説について

2.1. 概要 (Shogan (2015)を基に)

調査を行う前に，本節では今回の主たる媒体である一般教書演説について概観する。Shogan (2015)によれば，一般教書演説は米国行政府の長たる大統領が連邦議会議員を対象に行う施政方針演説であり，そこで大統領は過去一年の現状報告や政治課題について説明する。大統領の視点からは，政治要綱のすべてを一つの演説に盛り込んで伝える特別な機会であり，かつては憲法によって定められた義務から始まったものの，今や行政権や権威を行使するための原点にして，自らの権力について示す格好の場でもある。一方，連邦議会からも大統領の施政について詳細を知ることができる重要な演説の一つと目されている。

本演説は歴史も長く，初代大統領 George Washington によって 1790 年 1 月に最初になされて以来，原則として毎年行われている。時代の流れとともに形式や伝達方法が変化しているのも大きな特徴であり，1790 年から 1801 年までは口頭にて演説がなされていたが，Thomas Jefferson によって文書による伝達に形式が変更されたのを機に，1801 年から 1913 年までの約 110 年間にわたって大統領は年次報告を議会宛の公式文書として提出した。1913 年に Woodrow Wilson によって再び口頭での演説形式に戻されると，1934 年までハイブリッド，その後は 1981 年まではどちらの形式が取られることもあった。1981 年以降は口頭演説に一元化され，現在に至る。Shogan (2015) は，こうした形式や演説の長さの変化の背景にはテクノロジー，すなわちラジオやテレビ，インターネットの出現が重要な役割を果たしていると述べているが，これらのメディアの発達により，連邦議会や米国民のみならず全世界に注目される一大イベントとなっている。

2.2. 研究の動機

前節で見たように，一般教書演説は長い伝統を持ち，世界的な影響力もある。そのテクストの中で，使用の可否が問題となりうる分離不定詞は使われてきたのであろうか？既に述べたように，そのことに踏みこんだ先行研究は現時点では存在しない。そして一般教書演説は歴代大統領によってほぼ決まって行われており，形式，内容や意味合いに若干の変化はあれども，概ね均質かつ一定量のテクスト (18 世紀以降，現在までの約 230 年間のデータ) をまとめて得られることから，その時代の英語を十分に反映した歴史的言語資料として活用できると判断した。

3. データ・調査方法

本調査にて扱うデータを作成するべく，一般公開されたデータベース *The American Presidency Project* のサイトに所収の演説のスクリプトを集積する。本データベースは厳密にはコーパスではないが，そこから得られたスクリプトは電子テクストに変換することができる。そのためこの類の研究には有用であると考えられ，調査の前段階として，データのコーパス化を行った。 以下の表 1 は，本研究にて調査対象とする演説の一覧である。

表 1　一般教書演説コーパスの構成要素[2]

==========

Washington (1790-1796); Adams (1797-1800); Jefferson (1801-1808); Madison (1809-1816); Monroe (1817-1824); J.Q. Adams (1825-1828); Jackson (1829-1836); van Buren (1837-1840); Tyler (1841-1844); Polk (1845-1848); Taylor (1849); Fillmore (1850-1852); Pierce (1853-1856); Buchanan (1857-1860); Lincoln (1861-1864); Johnson (1865-1868); Grant (1869-1876); Hayes (1877-1880); Arthur (1881-1884); Cleveland1 (1885-1888); B. Harrison (1889-1892); Cleveland2 (1893-1896); Mckinley (1897-1900); Roosevelt (1901-1908); Taft (1909-1912); Wilson (1913-1920); Harding (1921-1922); Coolidge (1923-1928); Hoover (1929-1932); F.D. Roosevelt (1934-1945); Truman (1946-1952); Eisenhower (1953-1960); Kennedy (1961-1963); Lyndon Johnson (1964-1969); Nixon (1970-1974); Ford (1975-1977); Carter (1978-1981); Reagan (1982-1988); Bush (1989-1992); Clinton (1993-2000); G.W. Bush (2001-2008); Obama (2009-2016); Trump (2017-2020)

==========

分離不定詞は "*to* + 副詞 (相当句) + 原形動詞"という，特定の品詞語句の連結によって構成されているが，該当する構造を適切に抽出するためには，品詞情報の付与が不可欠となる。本研究では Brill Tagger を用いてアノテーションを行ったうえで，タグ付けされたテクストについて， コンコーダンサ AntConc を用いて当該構造を抽出する。[3] 次節以降で，本調査によって得られた結果を示し，分析を行う。[4]

4. 史的頻度推移の観察

以下の図 1 は，上記の手順で検索を行った結果，歴代大統領の一般教書演説において分離不定詞がどれほど使用されてきたかについて，その史的推移をあらわしたものである。(頻度は 1 万語あたりに調整済み)

---

[2] 各大統領には，演説を行うにあたりその原稿を執筆するスピーチライターが存在する。原稿を実際に書いているのは大統領自身ではなくスピーチライターであるため，演説に用いられている言語が必ずしも「大統領による英語」とは言い切れない可能性があることを研究会や学会にて指摘いただいている。筆者としては，確かに分析を行う際にはスピーチライターの存在を無視することはできないが，原稿を最終的にチェック，改訂した上で自分の言葉で発表するのは大統領本人であるということから，演説にて使用されている言語を「大統領による英語」とみなしたいと考えている。

[3] 分離不定詞を抽出する際の検索式は, "to_TO *_RB* *_VB"並びに"to_TO *_RB* *_VBP"である。

[4] 自動タグ付けは文脈を考慮していないため，品詞タグの付与が誤っている場合もある。今回の調査においても，動詞を修飾する副詞として使われているはずの *better* に形容詞 (JJ)のタグが付けられていたほか，副詞であるはずの *further* に動詞 (VB)のタグが誤って付与されていた。そのため，今回は CasualTreetagger および CasualConc も用例数の確認用として使用した。

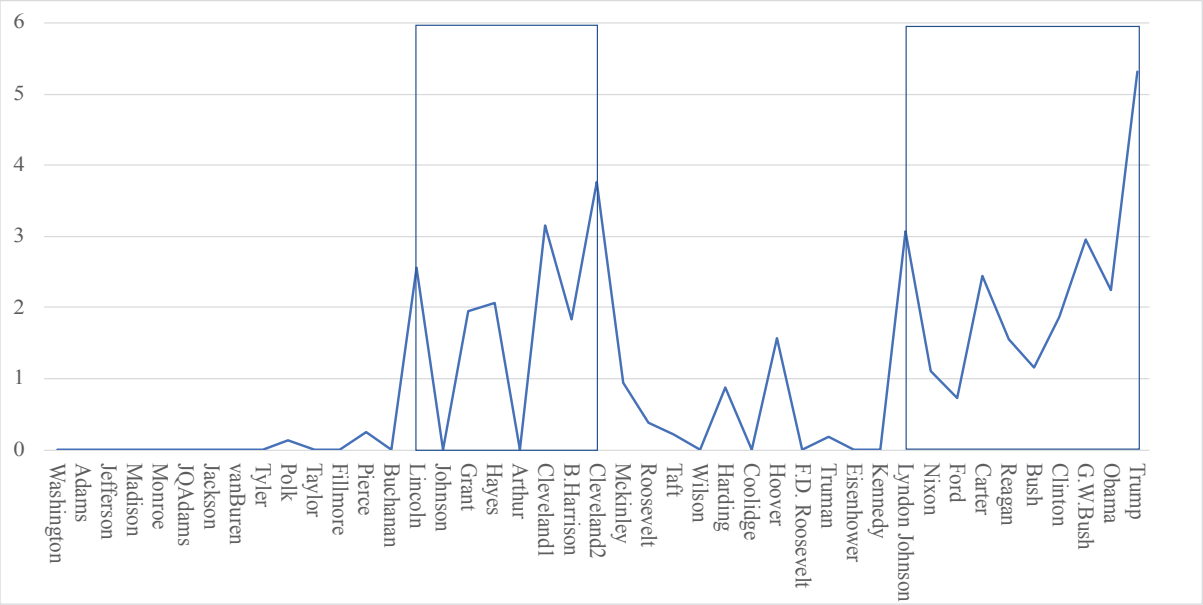

図 1 歴代米国大統領の一般教書演説に出現する分離不定詞の史的頻度推移

グラフから読み取れることとして， 18 世紀末以降, 分離不定詞は規範意識の影響によるものか, 19 世紀中頃になるまで一般教書演説中には出現することはなかった。本コーパスから得られた初例は第 11 代大統領 James Polk による, 1846 年のものであった。一般教書演説において分離不定詞を多用し始めたのは Abraham Lincoln である。彼は在任中の 4 回の全ての演説において最低一度は含めていた。彼を転換点として, 20 世紀初頭にかけては大統領ごとに許容度の差はあるものの, 演説中に分離不定詞が比較的多用されるようになった。一方で, 1910 年以降の大統領は使わないことが多くなり, この期間においては用例が一例も確認できなかった人物も少なくなかった。一方 20 世紀後半以降になると, 第 36 代大統領 Lyndon Johnson を皮切りとして（頻度的な揺れはあるものの）再び上昇傾向となり, 現在に至るまで任期期間中に一度も使用しなかった大統領は存在しない。とりわけ Donald Trump は, 1 万語当たりの相対頻度から, 歴代大統領の中で最も多くの分離不定詞を演説中に用いている。

これらのことから, すでに紹介したように一般教書演説はその形式に関して歴史的な変化があることに注意する必要はあるが, 頻度については概ね「19 世紀後半から 20 世紀初頭まで」、並びに 「20 世紀後半以降, 現在に至るまで」 (図 1 の枠で囲った部分) の期間は比較的多くの大統領が分離不定詞を用いており, それ以外の期間には用例数が極めて少ない」という量的傾向があると言ってよいだろう。この知見を基礎に, 次節では予備的分析として, 特に分離不定詞の使用頻度が高い大統領が多くいた 20 世紀後半の 1960 年代から 2020 年にかけて, その特徴的な用法について記述する。その際のリサーチクエスチョン (RQ) は以下の通りである。

(i) 一般教書演説にて使用されている分離不定詞の「構成要素」たる副詞および原形動詞にはどのようなものがあるか。

(ii) 分離不定詞と共起する表現や要素にはどのようなものがあるか。

5. 1960 年代以降の一般教書演説に出現する分離不定詞の特徴的用法についての分析

本節では, Lyndon Johnson の初年度 (1964 年) から Donald Trump の最終年度 (2020 年) までの期間に用いられた分離不定詞構造の特徴について, 複数の観点から考察してゆく。本調査では全部で 80 例が収集された。

5.1. 分離不定詞を構成する副詞および原形動詞について

まず本節では特に, RQ1 に答えるため, 構成要素となっている副詞および原形動詞に着目する。

5.1.1. 対象となる時代全体の傾向分析

対象となるレジスター (ここでは演説) の性質のためか, 分離不定詞の splitter (*to* 不定詞を「分割」する副詞相当句) となり得る副詞には, 「程度」や「時」の意味を表す副詞がその多くを占めており, 先行研究 (Albakry 2005: 146; Mitrasca 2009: 122 ほか) では小説などのテクストを調査対象とするものが多かったこともあり, 分離不定詞の構成要素として「様態」の副詞が中心的とされていたが, 今回の調査ではあまり多く見られなかった。以下の表 2 は, 今回抽出された分離不定詞の中で, 複数回, 分離不定詞の一部として使用されていた副詞の上位 13 項目とそれらに後続する動詞についての対応関係を示したものである。紙幅の都合で全てを示すことはできず, 早計な結論は出せないものの, 大まかな様相は見えてくる。

表 2 分離不定詞の構成要素として複数回使用されていた副詞および後続する動詞一覧[5]

splitter副詞	後続する動詞							
fully	control	deregulate	participate	fund	fund	restore	rebuild	fund
finally	end	put to rest	approve	slash	repeal	pass	close	end
better	protect	deliver	identify	secure	meet			
further	improve	protect	develop	protect	expand			
ultimately	have	eliminate	control	make clean				
just	review	mention	stop	talk				
successfully	participate	combine	deal with					
always	debate	be	remember					
quickly	enact	make available						
really	improve	solve						
carefully	explore	assess						
permanently	fix	extend						
greatly	increase	expand						

[5] 表中の後続動詞の並びは, 用例の使用年度の古い順である。

表 2 から読み取れることとして，やはり「程度」や「時・頻度」を表す副詞が構成要素として使われているパターンが多くを占めており，後続する動詞としてはそのほとんどが動作動詞であるというだけでなく，他動詞であるということも読み取れよう。このことから，分離不定詞を用いることにより，大統領が「特定の動作」に対してどのような「評価」を下しているのかについてはっきりと示すことができる。これは表 2 に現れていない構成要素についても同様のことが言えるため，大統領演説，少なくとも一般教書演説においては「*to* + 程度/時を表す副詞 + 他動詞の動作動詞」という語順が最も典型的なものであると考えられる。

5.1.2. 同じ型の分離不定詞を使用した用例

抽出された分離不定詞に使用されている副詞・動詞はきわめて多様であったけれども，全く同じ型の分離不定詞が別の大統領によって使用されていた事例がいくつか存在することは特筆すべき点かもしれない。[6] それらの用例を以下にて紹介する。

● ***to further protect***

(2) Now we intend to maintain the momentum we have developed by taking additional steps to further improve law enforcement **and <u>to further protect</u> the people of the United States.** **(Nixon 1973)**

(3) And so as we continue to diversify our fuel supply, we must step up domestic oil production in environment sensitive ways. **And <u>to further protect</u> America** against severe disruptions to our oil supply, I ask Congress to double the current capacity of the Strategic Petroleum Reserve. **(G.W. Bush 2007)**

上記 2 例では, Nixon と G.W. Bush が全く同じ分離不定詞の *to further protect* というフレーズを使用している。フレーズ自体が全く同じというだけでなく，その前後の接続詞，目的語も全く同じ (網掛け部分) ということも目を引くポイントである。この 2 人はいずれも共和党出身の大統領であることから, G.W. Bush が分離不定詞を使用するにあたり，過去の大統領による事例を参照して，敢えて同じ用法を使用している可能性を示唆するものである。

● ***to fully fund***

(4) Everyone in this chamber knows that Social Security is not prepared **<u>to fully fund</u>** their retirement. **(G.W. Bush 2001)**

(5) This program strengthens democracy, transparency, and the rule of law in developing nations, and I ask you **<u>to fully fund</u>** this important initiative. **(G.W. Bush 2008)**

(6) I am asking Congress **<u>to fully fund</u>** the Artemis program to ensure that the next man and the first woman on the Moon will be American astronauts, using this as a launching pad to ensure that America is the first nation to plant its flag on Mars. **(Trump 2020)**

---

[6] 大統領演説における定型表現などのフレーズには，過去の大統領の演説で用いられた言い回しを参考にする可能性があることについて，渡辺秀樹教授に御教示いただいた。

このパターンは，使用されている目的語は異なるけれども，類似した構文のもとで使用されていることが注目すべき点かと思われる。(5.2.1節も参照されたい)

● ***to finally end***

(7) With new resources, NIH will now become the most powerful discovery engine for an AIDS vaccine, working with other scientists **to finally end** the threat of AIDS. **(Clinton 1997)**

(8) We are working **to finally end** America's longest war and bring our troops back home. **(Trump 2020)**

この事例では，使用している大統領の政党は異なるが，これも互いに酷似した表現であると言えるだろう。

「全く同じ」形の分離不定詞が異なる大統領によって繰り返し使用されたのは本データからはこの 3 種類のみである。そのうちの一部はフレーズのみならず，前後の言い回しも類似したものを使用していたことから，大統領は語法についてもある程度それ以前の大統領による言い回しを踏襲しているということが示唆された。

以上から，ここまでの成果をまとめて RQ1 の答えとしたいが，少なくとも 1960 年代以降の大統領による分離不定詞としては，（それら以外のものもあるとはいえ）「不定詞マーカー*to*＋ 程度あるいは時の副詞 ＋ 他動詞の動作動詞」というパターンが大半を占めており，特定の動作に対する大統領による評価を明確に示すということを表していると考えられる。また，分離不定詞の構成要素として使用される副詞や動詞の種類は多様であるが，中には全く同じ組み合わせのもとで使用されていることもあり，過去の大統領による用例を参照している可能性が示された。

5.2. 共起する表現や要素について

本節では，RQ2 に答えるため，分離不定詞の用例に共起して使用されている表現や要素について検討する。

5.2.1. 命令や依頼の対象としての分離不定詞

この期間の周辺要素として特に目を引くのが，「～することを求める」という意味を表す構文と共起して，分離不定詞がその対象として扱われている事例がかなり多いことである。全部で 16 例確認され，以下の用例はその一部である。

(9) Tonight, I plead with the House **to immediately act** upon these measures and I hope take favorable action upon all of them. **(Lyndon Johnson, 1968)**

(10) I am therefore calling upon the Congress **to promptly enact** a new Heroin Trafficking Act. **(Nixon 1973)**

(11) I urge the Senate to move quickly and decisively in confirming Judge Anthony Kennedy to the highest Court in the land and **to also confirm** 27 nominees now waiting to fill vacancies in the federal judiciary. **(Reagan 1988)**

(12) Last year, I asked you **to voluntarily cut** the number and cost of earmarks in half. **(G.W. Bush 2008)**

上記の網掛け部分が命令や依頼に該当するが，ここの表現や時制なども大統領によって異なっており，目的語として *Congress* や *Senate* といった「議会」， *you* 「議員, 国民」などを取る。
すなわち，離不定詞を効果的に使うことによって，大統領の議会や他者に対する要望について明確に示すことができるという働きがあることがわかる。

尤も，2.1 節で見たように，一般教書演説は時代とともに大統領による議会への権力誇示の場としての側面が強くなっていったという背景があり，そもそも命令や依頼について表明する文脈は他のテクストに比べても多くなっている。従って，この分析によって得られる事柄も，ある意味では当然の結果と言えるかもしれない。さらに，これらの分離不定詞に先行する動詞は *ask* や *urge* といったものであるが，これらは *to* 不定詞を後続させるので，分離不定詞が生起しやすい環境にあるということも事実である。とはいえ，この形式，構文のもとで使用される分離不定詞は，管見では他のテクストジャンルにおいて見ることはほとんどなかった。一方，この時期に大統領を務めたほとんど全ての人物が最低一度はこの形式において分離不定詞を用いている。[7] 従って，これはその演説に出現する分離不定詞に特徴的な用法の一つとして捉えても良いと思われる。今後の課題としては，「20 世紀後半の一般教書演説に特有の用法と言えるか」については疑問が残る。もし他の時代においてもこのタイプの分離不定詞が頻繁に確認されるということであれば，それは時代によるものではなく，ジャンルの性質によるものである，と考えられるためである。

5.2.2. 先行接続詞 *and* との共起

また，接続詞 *and* と共起し，列挙された事柄 (主に *to* 不定詞)の一つとして分離不定詞が用いられている用例も散見された。

(13) A second principle of policy is the effort to control, *and* to reduce, ***and*** **to ultimately eliminate** the modern engines of education. **(Lyndon Johnson 1966)**

(13)のように, to 不定詞が複数回並置されている場合，その最後の箇所に分離不定詞が用いられる，というパターンが確認された。さらに特徴的な用法として, *and* が分離不定詞同士の平行構造を形成するために使用されるという例もあった。[8]ここでは「*to* + *further* + 動詞」という一連の形式が *and* を用いて並列されている。以下に，先ほど(2)にて検討した文を再掲する。

(2)' Now we intend to maintain the momentum we have developed by taking additional steps **to further improve** law enforcement ***and*** **to further protect** the people of the United States. **(Nixon 1973)**

---

[7] Lyndon Johnson 2 回, Nixon 1 回, Carter 1 回, Reagan 1 回, Clinton 3 回, G.W. Bush 4 回, Obama 1 回, Trump 3 回
[8] 本用例が平行構造をなしていることについて，渡辺秀樹教授より御示唆をいただいた。

さらに, 5.1.2 節にて取り上げた, (2) の *to further protect* と同じ構造の分離不定詞については, 文頭に *and* が置かれているが, これはいわゆる接続詞 *and* の「拡張的」用法 [9] であると考えられる。

(3)' ***And*** **<u>to further protect</u> America** against severe disruptions to our oil supply, I ask Congress to double the current capacity of the Strategic Petroleum Reserve. **(G.W. Bush 2007)**

このように, 分離不定詞は *and* と様々な用法のもとで共起していることがわかった。

それでは, RQ2 の回答をすることによって本節のまとめとしたいが, 一般教書演説で大統領が使用している分離不定詞に先行して共起する要素から用例を観察した結果, 命令や依頼の対象として機能させている用法や, 列挙, 並列構造の並置, 拡張的用法など多様な用法を持つ接続詞 *and* との共起を確認することができ, ディスコースの中で分離不定詞が強調される用法が特徴付けられた。

6. おわりに

本研究では, 分離不定詞構造が現代アメリカ英語においてどのような使用のされ方をしているかについて検討するために, 歴代米国大統領による演説, 特に歴史ある一般教書演説テクストをコーパスとして予備的な調査分析を行った。

量的変化としては, 分離不定詞は 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて使用され始め, 20 世紀前半に一時的に減少したが, 後半以降再び増加傾向にある。すなわち, 一般教書演説のような伝統あるジャンルにおいても, 特に近年ではごく自然に発見できる構造であることがわかる。20 世紀後半以降, 特に 1960 年代以降の増加傾向が顕著であったことから, この期間において使用されている分離不定詞の用法について考察した。今回抽出された用例からは「*to*+ 程度/時をあらわす副詞 ＋他動詞の動作動詞」というパターンが最も多く, 特定の動作に対する大統領による評価を明確に示すために本構造が用いられているというのが自然であると考えられる。さらに, 命令や依頼, あるいは列挙や並列の *and* と共起して, ディスコースの中で強調されながら用いられるということも明らかにした。

ただし, 本試論はあくまで 1960 年代以降の特徴についての分析であり,「分離不定詞の特徴的用法」と指摘した点については他の時代における用例と比較することが今後必要となる。さらに, 今回指摘した事柄が演説に「特徴的」と言えるかについては, 演説以外のテクストとも比較しつつ, より高度な統計的手法も用いながら処理・分析される必要があるだろう。それらについては今後の課題とし, 別稿にて議論する予定である。

---

[9] ここでの文頭の *and* が「拡張的」用法であることについて, 渡辺秀樹教授より御示唆をいただいた。

注記・謝辞

本稿は， 2021 年 10 月 28 日に行われた大阪大学言語文化学会第 59 回大会での，筆者の口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。学会発表に先立つ研究会にて発表の機会と有益な御助言を下さった，田畑智司先生をはじめとする先生方ならびに院生メンバーの皆様に感謝申し上げる。草稿作成にあたり貴重な御教示を下さった渡辺秀樹先生，および学会にて的確な御質問・御指摘を下さった大森文子先生，田村幸誠先生にもこの場をお借りして深く感謝申し上げたい。

文献

Albakry, M.A. (2005) *Style in American newspaper language: Use and usage.* Unpublished Doctoral Dissertation Thesis, Northern Arizona University.

Alford, H. (1864) *The Queen's English; Stray notes on speaking and spelling.* London: Strahan.

Calle-Martín, J. (2015) "The Split Infinitive in Middle English." *North-Western European Language* 68(2): 227–259.

Calle-Martín, J. and Antonio, Miranda-García. (2009) "On the Use of Split Infinitives in English." In Antoinette, R and Andrew, K (eds.) *Corpus Linguistics: Refinements and Reassessments*. 347–364. Amsterdam: Rodopi.

Calle-Martín, J. and Romeo-Barranco, J. (2014) "On the use of the split infinitive in the Asian varieties of English". *Nordic Journal of English Studies*, 13 (1) 130–147.

Curme, G.O. (1931) *A Grammar of the English language. Volume3: Syntax.* Boston; London: DC Heath.

Fischer, Roswitha. (2007) To Boldly Split the Infinitive - or Not? Prescriptive Traditions and Current English Usage. In Stephan E., Nils L, Joachim S. and Wim V.(eds.) *Germanic Language Histories "from Below" (1700–2000)*, 259–273. Berlin: Walter de Gruyter.

Fowler, H.W. (1926) *A dictionary of modern English language.* Oxford: Clarendon Press.

Fowler, H.W. and Fowler, F.G. (1906) *The King's English.* Oxford: Clarendon Press.

福本広光 (2018) 「アメリカ英語での分離不定詞使用実態調査と考察：使用されたsplitterを中心に」渡辺秀樹 (編) 『言語文化共同研究プロジェクト2017 レトリック、メタファー、ディスコース』75–87. 大阪大学言語文化研究科.

Fukumoto, H. (2019) "A Corpus-Based Analysis of Split Infinitives in American English: With Special Reference to "Splitters" from Diachronic and Rhetorical Viewpoints." 大阪大学言語文化研究科 (修士論文).

Fukumoto, H. (forthcoming) "Split Infinitive in American Presidential Speeches: Diachronic and Stylistic Approach Focusing on the Cases of Abraham Lincoln." 『文体論研究』第 68 号. 日本文体論学会.

Huddleston, R. and Pullum, G.K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Mitrasca, M. (2009) "The split infinitive in electronic corpora: Should there be a rule?" *Concordia Working Papers in Applied Linguistics,* 2: 99–131.

Perales-Escudero, M. D. (2011) “To Split or to Not Split: The Split Infinitive Past and Present.” *Journal of English Linguistics* 39 (4): 313–334.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, J. and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Shogan, C.J. (2015) “The President’s State of the Union Address: Tradition, Function, and Policy Implications.” (https://fas.org/sgp/crs/misc/R40132.pdf)

Visser, F, Th. (1966) *An Historical Syntax of the English Language. Part II: Syntactical Units with One Verb (Continued)*. Leiden: E. Brill.

データベース

The American Presidency Project. (https://www.presidency.ucsb.edu/) (2022年1月20日最終閲覧)

コンコーダンサ等

Brill Tagger (https://cst.dk/online/pos_tagger/uk/index.html)

AntConc (https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/)